

<報道発表資料>

令和8年1月21日

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課

京都文学賞実行委員会

「第5回 京都文学賞」受賞作の発表及び表彰式の開催

京都市では、文学の更なる振興や「文化都市・京都」の発信等に寄与するため、令和元年度から「京都文学賞」を実施しています。

第5回京都文学賞においては、令和6年8月1日から令和7年5月9日まで作品の募集を行い、298作品の御応募をいただきました。書評家等による一次選考、読者選考委員による二次選考を経て、昨年11月下旬に最終選考会を開催し、二次選考を通過した9作品の選考を行い、受賞作が選定されました。

この度、受賞作を発表し、1月28日（水）に表彰式を開催します。



アートワーク／千葉雅也 ビジュアルデザイン／赤井佑輔

【受賞作品】（詳細は別紙1参照）

	一般部門	中高生部門	海外部門	合計
応募作品数	256	31	11	298
一次選考通過作品数	27	9	3	39
二次選考通過作品数	4	3	2	9
受賞作品数	3	2	2	7

<一般部門>

- 最優秀賞、読者選考委員賞（詳細は別紙2参照）

作品名 「花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～」

作者名 おぎなお紺（おぎなおこん）＝ペンネーム＝

- 最優秀賞

作品名 「レッツ・オバンギャルド」

作者名 万願寺マサ子（まんがんじまさこ）＝ペンネーム＝

※ 議論を重ねてもなお甲乙つけがたく、いずれも最優秀賞に相応しいと評価され、両作品を「最優秀賞」としました。

- 優秀賞

作品名 「波のゆく先」

作者名 橋爪 志保（はしづめ しほ）

<中高生部門>

- 最優秀賞

作品名 「みーちゃんのメガネ」

作者名 山本 千遥（やまもと ちはる）

- 優秀賞

作品名 「十年で二日の修学旅行」

作者名 齋藤 琉晴（さいとう りゅうせい）

<海外部門>

- 最優秀賞

作品名 「そしてまた続く」

作者名 ステッグミューラー アヒム

- 優秀賞

作品名 「この花、ここで咲くわけでは」

作者名 叁朗（さんろう）＝ペンネーム＝

※ 最優秀賞には至らなかったが、巧みな描写で京都独特の雰囲気を出し出すことに成功しており、自然と映像が浮かぶ作品と評価され、「優秀賞」としました。

<参考>最終選考委員（9名、敬称略）

いしい しんじ〔作家〕、西 加奈子〔作家〕、校條 剛〔作家・評論家〕、

大垣 守弘〔(一社)京都出版文化協会代表理事〕、平賀 徹也〔京都市文化芸術政策監〕、

読者選考委員の代表（4名）

＜参考＞賞の内容※1

- 一般部門 最優秀賞 1 点：賞金 100 万円※2、出版化
優秀賞 1 点：賞金 50 万円
- 中高生部門 最優秀賞 1 点：図書カード 10 万円分
優秀賞 1 点：図書カード 5 万円分
- 海外部門※3 最優秀賞 1 点：賞金 10 万円
- 全部門対象 読者選考委員賞 1 点（副賞なし）

※1 下記の賞のほか、最終選考会における議論の結果、賞を贈ることがあります。

※2 今回、最優秀賞が 2 点選出されたため、賞金は 50 万円ずつ折半。

※3 海外部門の優秀賞は賞金 5 万円。

【表彰式概要】

- 日時
令和 8 年 1 月 2 8 日（水） 午前 1 0 時 4 5 分～
- 場所
京都市役所 本庁舎 4 階 正庁の間
（京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町 4 8 8 番地）

- 出席者
受賞者及び同伴者
来賓

下村 あきら	京都市会議長
加藤 昌洋	京都市会文教はぐくみ委員会委員長
もりもと 英靖	京都市会文教はぐくみ委員会副委員長
増成 竜治	京都市会文教はぐくみ委員会副委員長

最終選考委員

いしい しんじ	作家
西 加奈子	作家 ※オンライン参加
校條 剛	作家・評論家

京都文学賞実行委員会等

松井 孝治	京都文学賞実行委員長（京都市長）
大垣 守弘	同 副実行委員長（（一社）京都出版文化協会代表理事）
大西 祐資	同 副実行委員長（京都新聞社代表取締役社長・主筆）
稲田 新吾	同 委員（京都市教育長）
清水 正美	同 委員（（一社）京都出版文化協会理事）
高橋 晴久	同 委員（京都新聞総合研究所所長）
洞本 昌哉	同 委員（京都府書店商業組合副理事長）
平賀 徹也	同 委員（京都市文化芸術政策監）
辻井 南青紀	同 監修・アドバイザー（小説家、瓜生山学園京都芸術大学大学院芸術研究科教授）

吉田 良比呂 京都市副市長

読者選考委員（最終選考会に参画した委員は現地参加、その他委員はオンライン参加）

● 次第

開会

出席者紹介

表彰状及び副賞の授与

主催者挨拶 松井 孝治 実行委員長（京都市長）

来賓祝辞 下村 あきら 京都市会議長

受賞者挨拶

最終選考委員講評

歓談

閉会 ※閉会后、記念撮影

<添付資料>

別紙1 受賞作等紹介（作品のあらすじ及び一部抜粋、作者のプロフィール及びコメント）

別紙2 読者選考委員賞

別紙3 最終選考委員選評（いしいしんじ氏、西加奈子氏、校條剛氏）

<お問合せ先>

京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化芸術企画課

電話：０７５－２２２－３１１９

《一般部門 最優秀賞》《読者選考委員賞》

「花洛尽く都絵師の洛中洛外顛末記」

あらすじ

足利將軍家御用達の絵師集団「狩野工房」の次期棟梁である狩野源四郎（後の永徳）は、相棒の三左を連れて自由気ままに京の町へ繰り出しては、目の前の風景や出来事、人々の暮らしを絵に閉じ込めていく。ある時、源四郎は將軍から京のすべてが描かれた「京尽」の屏風を描くよう命じられる。誰も見たことのない唯一無二の屏風を描くため、源四郎たちが日々奮闘する中、都を揺るがす大きな事件が起こる——戦国時代の京都を舞台に、大切な人との出会いや別れを通して、ありのままの京都を描き上げていく源四郎と三左の成長を描いた歴史小説。

作者プロフィール

おぎなお紺（おぎなおこん） 〓ペンネーム〓

一九七一年、京都市生まれ。滋賀県在住。

佛教大学社会学部社会福祉学科卒業。

元滋賀県立特別支援学校教員。

二〇二三年、第一回青いスピnEnter選、二〇二四年、第二回京都キタ短編文学賞一般部門優秀賞、

二〇二五年、第三回同最優秀賞受賞。



受賞コメント

狩野永徳の洛中洛外図屏風に本格的に出会ったのは、二年前。お尻を出して焚き火にあたる男の子がいて、抱っこ紐に赤ちゃんをくるんだお母さんがいる。千本ゑんま堂では狂言が演じられ、先頭をゆく長刀鉾が切ったしめ縄までもが描かれている。四百年前と変わらない人々の営みと伝統に魅せられて、この絵を物語に閉じ込めたいと思いました。

執筆中は浮かれたように京都のあちこちを訪ね、空気を吸い、匂いを嗅ぎ、戦国時代の都を妄想。前世の私は狩野工房にいたのでは？と思うほどにのめりこんだ時間は、とてもエキサイティングでした。

その物語が本になる。こんなに嬉しいことはありません。

審査員の皆様をはじめ、京都文学賞に関わってくださったすべての方に、心より感謝申し上げます。ありがとうございました。

作品の一部抜粋

いつのまにか、山だけでなく空までもが、柿色に染まり始めていた。河原から吹く風が冷たく、酔って火照った身に心地よい。

「それにしても、源四郎」

公方さまが、切れ長の目を細める。

「先ほどはよう言うた。狩野を背負う男として、申し分ない言いっぷりだったな」

「じいさまの受け売りですよ」

源四郎がうそぶく。

「ふふん。しかし、お前の言う通りだ。足利家の御用絵師と呼ぶには、もう少し狩野に仕事を頼まねばならんな」

公方さまは、形のいいあごをなでた。

「決めた。源四郎。屏風を描け」

「はあ？」

源四郎が間の抜けた返事をする横で、俺は背筋を伸ばした。將軍直々の仕事の依頼。俺なんかがこんな場に立ちあえることなんて、めったにない。

「そうだな。秋の嵯峨野を描け。今日という日を何度も思い出せるような屏風だ」

「秋の嵯峨野……」

思わず声が出た。

源四郎の筆が、大きな屏風の上を走るさまを想像する。燃えるように色づく山を、激しく流れてゆく川を、静かに佇むたくさんさんの寺院を、楽しみに人々が行きかう門前町を。

源四郎の筆は、ち密に、でも伸びやかに、「今日」という日を写し取る。

見てみたい。

源四郎が描く、秋の嵯峨野を。

源四郎が俺を見て、無言でうなずいた。

俺も、無言でうなずき返す。

「描きたくなければ、鳥は描かなくてもよいぞ」

ニヤリと笑う公方さまに、

「精進いたします」

俺たちは深く頭を下げた。

「よし、決まった。裏。舞え」

「はい。殿」

裏さんはすつと立ち上がり、座の中央へ進んだ。ご家来衆が鼓を出してくる。ポンポンと優しい音が、秋の嵯峨野を包み込む。その音に合わせて、裏さんがふわりと舞った。

暮れてゆく空の下、しなやかに舞う裏さんは白ユリのように、俺はいつまでも見とれてた。

《一般部門 最優秀賞》 「レッツ・オバンギヤルド」

あらすじ

還暦を過ぎた紫香子さんはこれまで自転車に乗ったことがなかったが、单身生活を送る自転車王国・京都で一念発起し自転車教室に通い始める。夫からの経済DV、娘との関係、実家の家族からの抑圧。様々な問題や過去の重荷を抱える紫香子さんは、異質なものの受け入れる懐の深い京都のまちでの生活や自転車教習を通じて、自分の心の奥底に触れることになる――過去と現在を行き来しながら、やがて他の誰でもない自分自身を取り戻し、本当の自由を手に入れて未来へ漕ぎ出す女性を描く物語。

作者プロフィール

万願寺マサ子（まんがんじまさこ） 〓ペンネーム〓

一九六一年生まれ。京都市在住。

上智大学文学部卒業。



受賞コメント

知りたいことがある。追求したいことがある。やむにやまれぬ思いから、執筆にとりかかった作品でした。どこに行き着くかは分からないけれど、考えながら、いえ、考えるために書くというやり方で。

材料は、あっちこっちから借りてきました。けれども事実そのものを、書いたつもりはありません。私が書きたかったのは、真実であって事実ではない。はたして成功したでしょうか。甚だ心もとないけれど、それでもよし、読んでいただける機会が訪れたなら、ことに今、学校や家庭や社会の中で、立ちすくんでいるあなたに訪れたなら、どうかオバンギヤルドな風が、あなたの胸にも吹きますように。

この地で出会えたあの人この人、拙作に光を当てて下さった審査員の皆様、ありがとうございます。

作品の一部抜粋

「はいっ、そこで左足もペダルに乗せて！」

開始後十分がたっていた。いつの間にかレッズンは進み、紫香子さんは自転車と共にコースの上へ出ていた。サドルを目一杯下げてあるとはいえ、またがつているのは通常仕様の二十四インチだ。

右足をペダルの上に乗せ、左足で地面を蹴っていた紫香子さんは、坂上さんのかけ声に、とっさに左足もペダルに乗せた。

後ろからさらに声が飛ぶ。

「背中を丸めないで！顔を上げて！」

ふと風を感じた。ぐんぐん景色が迫ってくる。生まれて初めての感覚だ。

あっ。

倒れる、と思ったときには、後ろを走っていた坂上さんの手が伸びて、しっかりと車体を支えてくれた。

息が切れている。顔が熱い。心臓が激しく打っている。

「大丈夫です」

あくまでソフトに、しかし確信に満ちて坂上さんは言った。

「いま、乗れましたね。あとは細かいコツを覚えて、繰り返し練習するだけです」

たとえば、と坂上さんは、コースの端に落ちている枯れ枝を指差した。

「あの枝を避けようと思つて枝を見ると、かえってそこへ引き寄せられてしまいます。障害物を避けようと思つたら、そのものを見てはいけません。その先、進みたい方向を見るのです」

「進みたい方を見る……」

紫香子さんは息を整えながら、坂上さんの言葉を繰り返した。

「そうです。つい足元を見がちですが、顔を上げて、先を見ること」

ああっ……。

紫香子さんは思わず震えた。

「自転車に乗るのって、未来を見ることがなんですね！」

「なるほど」

表情を変えずに、坂上さんはうなずいた。

「ステキな解釈です」

帰りは西側の道を下つていった。予想通り静かな家並が続いている。北山通に突き当たると、来たとき下車したバス停よりも、ひとつ西寄りのバス停の方が近く見えた。地図で確認してみると、紫野泉堂町というバス停だった。「紫」の文字に親しみを覚え、ゆるい坂をのぼっていく。交差点の先が千本通、北山通の果てだった。

はるばるやって来たものだ。

紫香子さんは来た道を振り返った。

《一般部門 優秀賞》 「波のゆく先」

あらすじ

璃子は小学六年生。自分が生まれる前、心中未遂の末ひとり海で亡くなったという父を思いながら、水泳の練習に精を出す日々を送っている。ある日、璃子のクラスに東京からの転校生・佃くんがやってくる。将来漫画家を目指している佃くんとふとしたきっかけで話すようになった璃子は、これまで誰にも言えなかった父のことを打ち明ける。授業で習った安徳天皇のエピソードと、父の話に着想を得た二人は、様々な思いを胸に「波の下のもうひとつの京都」を主題に漫画を描き始める――各々の異なる寂しさを抱えつつ、挫折を経験しながらも成長してゆく子どもたちの物語。

作者プロフィール

橋爪 志保（はしづめ しほ）

一九九三年、京都市生まれ。京都市在住。

同志社大学文学部美学芸術学科卒業。

二〇二〇年、第二回笹井宏之賞の永井祐賞受賞。

受賞。

二〇二一年、歌集『地上絵』（書肆侃侃房）出版。



受賞コメント

生まれてから今までの三十二年間住んだ京都には、溢れるほどの愛憎があります。それは、観光に来た方々が抱く京都を大切に思う感情とは異なっているような気がします。しかし京都は、確かにわたしにとっても大切なのです。登場人物の力を借りて、その思いを全力で表現した結果、このような賞をいただけたことがうれしくてなりません。

この小説の主人公たちは、創作によって各々の内面を見つめ直し、悲しみを癒そうとします。小説を書くわたしも同じことをしていると感じます。しかし、作品を発表することはそれだけにとどまらない、他者の心も動かすことができる行為だとわたしは信じています。

心を動かしてくださった選考委員の皆様、関係者の方々に心よりお礼申し上げます。

作品の一部抜粋

砂川先生は、今度はみんなに資料集を開かせて、舟に乗って平氏と源氏が戦っている絵について説明しはじめた。平氏が赤い旗で、源氏が白い旗やったのが運動会の紅白の起源とか、そういうエピソードのあと、先生は眉毛をきゅっと上げて、続けた。追われた平氏側には、安徳天皇という人がおってんな、この人は、壇ノ浦の時点で数えて八歳、実際は六歳くらいの子どもやった。でもかわいそうに、死ななあかんことになったんやなあ。海の淵で二位尼に抱きかかえられて、何て言われたと思う、「波の下にも都はございますよ」。それで、小さな天皇はそのまま、海の中へどぼん、や。

その瞬間、海の冷たさとしぶき、水面に叩きつけられた身体の痛み、水の塩辛さ、皮膚には圧、着物のへばりつく重さ、だだだだとかましい鼓動、それら何もかもが、わたしにははつきり感じられた。足がつかへんから腕の中でもがく、腕は硬い、口に水ががっばんがっばん入ってくる、胸が焼ける、痛い、痛い、痛い、苦しいとも思えない、痛いのは怖いつてことや、怖い、助けて、でも誰に、喧騒、泣き声、叫び声、もうあかんと言った、誰もこの腕から逃れる方法を知らん、でも、そう近くないうちに、身体からはゆっくり力が抜けていつて、波の動きに預けられながら、顔を下にして沈んでいく。

隣の席の西村くんが「並野の下あ？」とわたしの苗字にあわせて冗談を言ったみたいやっただけ、全然うまく笑われへん。全身が引きつるような感覚で、心臓の存在感。んが、と自分の口から変な声が漏れそうになった瞬間、チャイムが鳴った。

お、終わりや、続きはまた明日やな、ってちゃうわ明後日やな社会は。砂川先生の声で我に返ると、教室は教科書をたたむ音、鉛筆を筆箱にしまう音、椅子を引く音で満たされる。息を吸って吐く、吸って吐く、吸って吐くを意識して繰り返してたら、唾が気管に入って盛大にむせる。咳をしたら、口は空気をまた吸って吐いて、わたしは「あんとかく天のう」とだけノートの隅に走り書いて、はたきように閉じ、下敷きを挟んだまま机の下にねじりこんだ。

水曜日は五時間目までしかないの、授業はそのまま帰りの会に移行した。でも、苛立ちのような焦りのような感情はまだ続いてて、日直の沢井くんの声はよう耳に入ってこへん。沢井くんが一日の報告を終えると、今度は砂川先生が話す番。先生は、ばんばんと手を打って教室の私語を完全に消してから、大事なお知らせです、ともったいぶった。えー、実はなんと、来週からこのクラスに転校生が来ます。

えええ、と教室が沸き立った。転校生、転校、とみんなが口々にざわめく。わたしもこの大ニュースにはさすがに驚いて、今日はなんやどきどきすることがぎょうさんある。

《中高生部門 最優秀賞》 「みーちゃんのメガネ」

あらすじ

小学二年生のみーちゃんは常にメガネをかけているが、あることをきっかけに違和感を覚えてメガネを外してしまう。その日の夕方、いつものように堀川五条の歩道橋から交差点を見下ろすと、そこには赤い服を着た、たくさんの「人」が動き回っていた。メガネを外すことで見えた世界、メガネをかけることで見えていたものが見えなくなった実体験を経て、大人びた子供のみーちゃんが成長する姿を描いた物語。

作者プロフィール

山本 千通（やまもと ちはる）

京都市在住。

高槻高等学校二年。

二〇二四年、第二回京都キタ短編文学賞

ジュニア部門最優秀賞受賞。



受賞コメント

どんな物語を書くかと考えていた時、脳裏に浮かんだのは少し前に見た新聞の記事でした。「大人」に区分されることがあれば、「子供」に区分されることもある。その不安定な感覚を小学二年生の女の子だったらどのように受け止めるのだろうかと思像して書きました。

舞台は京都ですが、有名な観光地や寺社が登場しなくても、書いているうちに自然と物語の世界が広がっていきました。それだけ、京都という土地には隔々まで人を惹きつける不思議な力が宿っているのだと改めて感じました。

私の大好きな京都が題材の小説で賞を頂けたことを大変嬉しく思います。選考・運営に関わってくださった全ての方に感謝申し上げます。本当にありがとうございました。

作品の一部抜粋

みーちゃんは家に着くと、鏡の前に直行した。お風呂に入る時以外でメガネを外して鏡を見るのは久しぶりだ。子供の遠視の場合、ずっとメガネをかけていたら、中学生くらいには外せるようになることが多いと聞いていたからだ。

——これが本当のみーちゃんなのか。メガネなしで見た自分の姿は、やはりちよつとだけばやけている。試しにメガネをかけてみると、いつものみーちゃんに戻っていた。鏡の自分と目を合わせ、そこではっとした。目が、なんだか変だ。メガネをつける前と後で大きさが全然違う。小さなレンズに溢れんばかりの大きな目。虫眼鏡で拡大されたかのように、これじゃあまるで人間じゃない。

そんなことでメソメソするみーちゃんじゃない。そう言い聞かせてはみたものの、なんとなく悲しくなった。メガネはピンクのケースにしまい込んで宿題に取りかかった。

計算のドリルをしていても、漢字の勉強をしていても、メガネを外した影響はあまりなかった。滞りなく宿題を済ませ、五時からは水泳教室に行く。時間びつたり近所の友達のなつちゃんが家に来てくれて、それから一緒に歩いて壬生のプールに向かうのだ。帰りはママが迎えにくる。

今日もなつちゃんは「こっんにっちは」と元氣よく挨拶をして、みーちゃんの家を訪ねてきた。

「ちよつと待ってて。今行くし」

メガネをかけて行こうか迷ったが、置いていくことにした。なつちゃんがいるなら大丈夫だ。

外に出ると、もう日は暮れかけていた。西の空は今度こそ真っ赤に染まっている。車のライトもちらほらと光り始めていた。

水泳教室までの道中でなつちゃんと話すことは大抵決まっている。一番多いのは、最近報じられているニュースに関してだ。ここ何週間か続けて、闇バイトについて語り合っている。詐欺の受け子から強盗殺人まで。どうしてそんなことが起きるのか。そしてどうしたら防げるのか。二人とも主な情報源は京都新聞だから、話も合う。大人なみーちゃんにとっては完璧な話し相手だ。

熱心に話し込んでいると、いつの間にか堀川五条の歩道橋の上まで来ていた。巨大なその交差点をチャリと見下ろす。ここでは夜になるといつも、車の赤いランプが潮の流れのように動き回るのが。信号の指示に従って、車が規則正しく流れていく様子はサーカスみたいで、みーちゃんは結構気に入っている。

今日もその姿を一目見ようと思ったのだが、みーちゃんはあれ？ と首を傾げた。確かに、広い道に赤いものが流れているのは変わらない。しかし、それは「もの」ではないように見えた。これはきつと「人」だ。そう、赤い服を着ている「人」なのだ。歩道橋で囲まれた四角い枠の中は夕方なのに煌々と光っている。その中をたくさんの人がうじゃうじやと動き回っていた。

《中高生部門 優秀賞》 「十年で二日の修学旅行」

あらすじ

新人の中学校教諭の晶子は修学旅行の引率で京都を訪れる。晶子にとって十年ぶりの京都は大切な場所であり、忘れられない記憶がとどまる場所だった。今を明るく前向きに生きる生徒の高野に過去の自分を見た晶子の、もう一つの時間が動き出す――十年前の修学旅行で起こったある出来事を受け入れ、次の一步を踏み出すまでの晶子の再生を描いた物語。

作者プロフィール

齋藤 琉晴（さいとう りゅうせい）

埼玉県在住。

埼玉県立川口東高等学校二年。



受賞コメント

この度は、優秀賞に推薦いただきありがとうございます。

思い入れのある京都を舞台に学生としての記憶を作品に残せたことを光栄に思います。私自身、京都に初めて降り立ったのは、晶子と同じ中学三年の修学旅行でした。生憎の天気で、清水寺から絶景を望むことはできませんでしたが、間違いない青春の一ページに刻まれています。

京都文学賞の募集を見かけた時は直感的にこれだ、と思ったのを覚えています。その直感が当たったのか、それとも運命の悪戯か。いずれにせよ、私の人生にとって大きな転機となり、先の未来にも残る記憶になったことと思います。

日本語という美しい言葉を大切に、一人でも多くの人にその美しさを伝えるためこれから頑張っていきます。

数ある中から選んでいただき本当にありがとうございました。

作品の一部抜粋

「文句言ったら降り遅れるよ」

「はいはい」

痛く刺さる視線を無視して私は自分の席に戻った。新幹線は静かにスピードを落とし、京都駅に入ってしまった。僅かに見えた京都の街並みを駅の壁が奪い去り、京都という駅名表示が現れた。新幹線は完全に停車して扉が開かれた。京都の空気と東京の空気とが混ざり、それが助長してか生徒たちはさつきよりも勢いがある。流れるようにホームに降りた。生徒の川が階段に流れ、そのまま改札口へと向かった。

十年ぶりに見る京都駅だった。何もかも変わっていた。私の知っている京都ではない。一人だけ残された気分だった。足取りが鈍く、気が重い。コンコースまでの道のりで何度か躓いた。その度に生徒が笑い、その度に私の気持ちも軽くなった。温かな笑いだった。おかた、新人の私が緊張していると思っているのだろう。

「先生緊張してる？」

さっきの仕返しをするように高野さんは上目遣いをした。

「高野さんは私をからかっている？」

「もう、先生そんなこと言わないの。先生の心配してるんだから」

高野さんはスカートの埃を払ってちょこちょこ後ろをついて歩いた。

「高野さん、私は大丈夫。緊張なんてしてないし、ただちょっと考え事してたの」

私は淡々と言った。

「考え事？ そっか……」

それから高野さんは黙った。バツが悪くなって、

「高野さん」と、声をかけた。すると高野さんは目を丸くして擦り寄った。

「なに！」

「心配してくれてありがとう」

「いいよ！ あたし先生のこと好きだもん」

不意にかけられた言葉に、私はまた躓いた。そしてまた、高野さんが笑った。小声で「可愛い」と呟いて、それきり何も言わなかった。

私が公立中学校の教師になったのは今年の四月。出身校に赴任して最初の学年が三年だった。無論、担任ではなく副担任だが、未経験の私にとっては大変な大仕事だった。提出物の管理、クラスの運営、学校行事、日々の授業。だが、弱音を吐かずにはやって来られたのは修学旅行先が京都だったから。京都が好きとかそういうことではない。京都は私にとって大事な場所だ。一年前から修学旅行を経験するとは思わなかったが、結果的には良かった。京都が待っていると思えば仕事など苦ではなかった。

私の修学旅行は未だ終わらず続いている。それを終わらす為に私は教師になった。そして今日ここにいる。

とん、と胸を叩いた。私は前を向いた。

《海外部門 最優秀賞》 「そしてまた続く」

あらすじ

ドイツ出身の私は二十年前から京都に住んでいるが、愛着を感じている京都に大量の外国人観光客が押し寄せ、居心地のよい場所が次々に奪われていくことに苛立ちを募らせている。そんなある日、幼少期から苦手としている老婦人が来日し、葛藤しながらも京都案内を引き受けた私は、押し寄せる様々な感情と「対話」することになり――河童の空想に囚われている私が老婦人との対話を契機として、自分自身の人生を内省的に綴る私小説。

作者プロフィール

ステックミュラー アヒム

一九七七年、ドイツ生まれ。ライプツィヒのドイツ文学研究所で学び、チュービンゲン大学、同志社大学、関西外国語大学で日本学を専攻。現在、立命館大学でドイツ語講師として勤務。京都市在住。

二〇二四年、京都文学賞海外部門優秀賞受賞。ドイツ語でも執筆活動を行っており、二〇一〇年、エルゼラスカリシュラー戯曲賞、二〇一三年、シュヴァーベン文学賞受賞。

二〇二六年三月には、日本の大学で開催されるドイツ農民戦争に関するシンポジウムの計画を描いた小説『Der Prozess der Modernisierung（近代化の過程）』がドイツで出版予定。



受賞コメント

二〇〇〇年頃、ライプツィヒの古書店で働いていた友人が、日本文学の翻訳本を贈ってくれました。私はその本に夢中になりました。川端康成の『古都』や三島由紀夫の『金閣寺』も収められていて、どれも難解でしたが、遠い国をもっと知りたい、いつか原書で読みたいという憧れが芽生えました。それ以来、さまざまなことがありました。京都で過ごした年月のなかで、私はよく散歩をし、頭の中で周囲の環境と対話を重ねるうちに、自然と日本語で書きたいという願望が生まれたように思います。

京都文学賞は、自分の言葉を探している人々に場を提供するという点でも、改めて非常に意義深いものだと感じています。この機会がなければ、これらの文章は夢のように頭の中だけに留まり、存在し、形になることはなかったかもしれません。

作品の一部抜粋

私はいつも家でお風呂に入ることにはこだわっていたわけではない。一時期、温泉に行くのが好きだった。マティアスと私は長いハイキングに出かけ、その途中で休憩をとり、温泉でリラクゼーションした。二十年前はそれでも楽しかったし、コロナが大流行したときでさえ、私は銭湯や温泉で過ごすのが大好きだった。しかし、観光客が増えれば増えるほど、こうした安らぎとくつろぎの場は私にとって台無しになっていった。鞍馬でのハイキング中、イギリスの少年サッカーチームが私たちの平和な入浴体験を台無しにした。その後、すべてがどんどん悪くなっていった。小さな浴槽で出会う、さまざまな国のさまざまな男たちが増えていった。体を洗うときも、入浴後も、私はいつも日本人男性にとっても心地よさを感じていた。しかし、どんどん日本人男性が温泉から消えていった。狭い浴槽の中でさまざまな国の男たちが戯れれば戯れるほど、私の不安は大きくなっていった。それは衛生面の疑問から始まり、大声の騒音や空間の欠如にまで及んだ。浴室ではもはや空間や自然とのつながりを感じることはなく、イワシの漬物の缶詰の中にあるような気分だった。全員がイワシだったら幸せだっただろうが、私はいろんな種類の魚が入っている缶の中にあるような気がした。イワシの次はサバ、その次は鯛。耐えられない。湯の効能を期待して温泉にも行ったが、今では周囲に湯はほとんどなく、違う男の肌があるだけという印象を受けることもある。外国人客に母国の入浴文化を紹介する日本人男性を時々見かけた。リラクゼーションルームで彼らの会話をこっそり聞いていると、いかに温泉が疲れるか、いかに悪いものかということがわかった。かつて温泉は瞑想の場であり、安らぎとくつろぎの場であった。日本人は礼儀正しいが、自分たちの文化を外国人に譲ってしまったのだ。私もうそこには行きたくなかった。しばらくの間、銭湯やサバにも行って見たが、やはりダメだった。

朝日を浴びて目を覚ますと、バルコニーに出て、向かいのホテルの生い茂った屋上の庭からスズメが飛び上がるのを眺める。まるで大地から空へと移動する雨のように爽やかだ。そして灰色の傾斜屋根の上に落ち着く。この時間はまだ静かだが、あとで無精ひげの老人が餌をやる時、さえずり始める。

ドイツのカフェテラスに座ると、いつもスズメがそばにいる。ドイツでは、まずスズメが来て、次にウェイトレスが来る。私がとくに支払いを済ませ、店員から冷たい視線を向けられるようになって、スズメは私を温かく包んでくれる。スズメはいつもタイムリングを見計らってやってきて、去っていく。

私はよく京都のいくつかの場所が混雑していることに文句を言う。一人でいることに耐えられない時もある。今日、この土曜日にこの八階建てのアパートにいと、私はここに一人でいるような気がする。私だけがこの小さなアパートに残されてしまったようだ。このビルの周りの家々には誰もいないし、通りさえも静かだ。警察のサイレンも救急車のサイレンもない。奇跡的な理由で、病気になるったり、法を犯したりする人がいなくなった。スズメの絶え間ないさえずりだけが私を支え、孤独から遠ざけてくれる。私はスズメの群れに感謝している。

《海外部門 優秀賞》 「この花、こので咲くわけでは」

あらすじ

行きつけの立ち飲み屋でお酒を飲みながら煙草を吸う常連のムーさんに私は想いを寄せているが、彼を遠くから眺めるだけで何も行動を起こせずにいる。ある日、「店内禁煙」を予告する貼り紙を目にした私は動揺するが、今後も店に通うのか、ムーさんに聞くことができない。そんな中、常連客同士で二軒目に繰り出した後、流れてムーさんが私の家に泊まることになり――居酒屋の喧騒とは対照的な、切実で密かな想いを抱える大人の女性の心の機微を丁寧に綴った恋愛小説。

作者プロフィール

叁朗（さんろう） 〓ペンネーム〓

一九九四年、台湾生まれ。京都市在住。

台湾の大学のデザイン学科卒業。

現在、IT企業の会社員。



受賞コメント

祝福されて喜んだ方がいいと思う時、上手く喜びを感じられない場合、みなさんはどうなさるのでしょうか。

日常生活で、人間として真価が問われる時はいつも予測されていない時にやって来ます。どんな選択をしたとしても、どんな反応を取られても、その一瞬一瞬の感情の綾を掬い取るのが僕にとって生活上、もしくは人生に於いて一番魅力的な部分であります。初めて自分の文章を人に読んでいただくだけで、とっても嬉しくて素晴らしいことを体験させていただきました。この度、賞を頂くことに対しては、文字通りに恐縮しか思いませんでした。

僕の場合は、急遽仕事のお休みを取って、部屋を掃除したり、本を読んだり、気に入ったお菓子を頂いたりして、とにかく自分が喜ぶことをしてみました。感情の移りは上手いっただとかわからないが、善処してみました。感情の移りはみなさんは、どうなさるでしょうか？

作品の一部抜粋

よく一人で黙々とお酒を飲む印象があるが、彼は決して他人からの視線や感情の流れを見逃すわけではないと私は思う。

そんな彼を眺めながら、目の前のアジフライと白ラムのロックを一口し、疑問符がまた心の中で浮かんできた。

自分の感情に何回も疑う思いを起こしていた。自分はムーさんに對してどんな想いを抱えているのか、何回も整理してみたが、うまく結論にたどり着くことは一回もなかった。何か月前から、彼に對して特別な想いを抱えていることに気づいた自分がいて、まだ素直に認めることをしたくないため、いろんな言い訳もしてみた。その都度、彼を観察することしかできなかった。

まるで煙草を吸うために頑張っている世に生きている彼は、常に空気の流れを鑑みて、よく他の客の話題に合わせて笑みを浮かべる。でも、あの笑みが瞳まで届くことは一度もなかった。

適切に話題を振り出す彼はみんながトークを広げていくうち、出しゃばりすぎずに会話の輪から距離を取って、につこりと片方の口角しか上がらない微笑みを保ちながら聞き手になる。人の良さをちゃんと言葉にして褒めるが、心構えが客観的すぎることもしじみを感じられる。

何かの結論を出そうとはしないが、こういう自分を説得するような見直しは何回も繰り返してやっていたが、彼への想いは納得も諦めも、どっちにも着地できない。

そもそも彼の名前でさえも知らない。ム音から始まる苗字はいっぱいあるし、名前の略称の可能性もある。外見から見ると私より上であって、三十代後半ぐらいだが、雰囲気的にはもっと上な気がする。

隣で一緒に飲んで、話す機会は何回もあったのに、何故かこういう挨拶程度の質問を聞けない自分がある。時間が経てば経つほど、より聞けなくなる。

もう高校生じゃあるまいし、神秘感のある人に惹かれて、恋と勘違いするか。でも、この感情は確かに青春時代の自分に戻ったかのように、この状態を好んで、離さずに近寄られず、明白でも遠くてもわからずでも、曖昧でもない。ずっと酩酊状態のような、ぐちゃぐちゃになっている脳に浸り、想像を酒乱と化して自由に膨らませることで満足する自分がある。

少しずつ、常連たちの会話から掬い上げた情報は、私が知った彼の全てである。想像だけは時間の推移によって増していき、彼への想像が私が知ったムーさんと照らし合わせて、自分の中で彼の全像を彫り出す。たとえばそれが本当の彼ではないとしても、楽しんだ。だから私は取って聞かない。

やがて、稀に入ってくる新規客は煙に耐えられず、さっさと冷めたおかずを片付けて、暗闇へ逃げ込んでいった。

ムーさんの卓上の灰皿は裁縫用の針刺しみたいに煙草の残骸が刺し込まれて、ある意味で現代装飾芸術のような状態になっているとしても、早くも去っていた女性客の嫌がる目配りにまるで何も察していない様子で、また一本をふかした。

読者選考委員賞

からくづくし

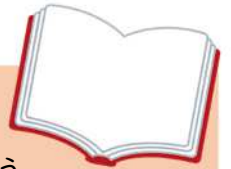
花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～

読者選考委員賞とは？

京都文学賞の作品選考に参画いただいている読者選考委員が受賞作を選定する賞として、第4回から創設。
読者選考委員が最終選考作品を読み、その中で最も評価を得た作品を「読者選考委員賞」に選定。



相棒の三左の視点で源四郎の特異さ、情熱を描いたことが、源四郎という特別なキャラクターを際立たせていて、とても良かった。



「ダイバーシティ＆インクルージョン」という現代のテーマも取扱っている点が単なる時代小説とは一線を画している。

たくさんのエピソードが盛り込まれていたが、それぞれが絡み合いながら物語が構成されていた。笑える場面や感動的な場面、ファンタジーもあり、読者を飽きさせない。



VOICE

読者選考委員の声

from
Selected General Readers

長編になると登場人物が多くなるが、関係性も分かりやすく、魅力的な人物たちだった。

京都の風俗、習慣、伝統、伝説が豊富に描かれており、読むにつれて情景が鮮明によみがえる。



ストーリーの完成度がずば抜けていた。歴史小説ではあるが、語り口調は現代的なので、誰にでも楽しめる作品だと感じた。

涅槃図や洛中洛外図屏風の本物を実際に見てみたいと思わせる作品だった。



多数の参考文献を土台にして、源四郎と三左が天下一の絵師を目指し奮闘する様子がコミカルに描かれていて好感を持った。

《選評》 いしい しんじ（作家）

第5回を迎えた本年度は、どの部門でも、作品のレベルがいちじるしく高かった。すばらしい作品を寄せてくださったすべての応募者に、まずはここからの拍手を送りたい。

中高生部門。

「文月の影響」は、一文一文、歩を進めるようにつづられる、落ちついた書きように好感をもった。先達の文学者・志賀さんに導かれ、十五歳の主人公・冬馬は、堀辰雄、漱石、さらに京都に縁のある文人画家の気配をたどる。

読み進むうち、「もう一步、踏みこんでほしい」と感じた。冬馬がどんな人間か、どんな生を生きてきたか、なぜこんなに日本文学（京都文学）にひかれるのか。とりわけ、くりかえし語られる「火」について。志賀さんたちとはちがい、冬馬はこの世でいのちを燃やし生きているはずだ。その火の色、勢い、熱量はどんなだったろう。過去に生きた文人の影でなく、冬馬でしかない、その生、いのちのありようをこそ見せてほしかった。

「十年で二日の修学旅行」。教師になった現在の晶子、中学生だった十年前のしょうこ、それぞれの修学旅行が、みずみずしい文体で交互にかたられる。やがてしょうこの身とその友人の身にふりかかった事件が明かされる。

とちゅう、時間の転換があまりにめまぐるしく感じた。プロットの都合に合わせ、ところどころ自然に流れていない箇所も見受けられた。

ただ、事故の場面の筆致は、それらを振りはらって断然力強い。ここだけはぜったいにブレるものか、ぜったいに書ききってやる、という気迫を感じた。著者は勇気をふるい、文学にむかって、ことばをこえた一步を踏みだしている。その一步をことほぎたい。

「みーちゃんのメガネ」。読みはじめて、すぐさま余白に「とてもいい」「たのしい」と書きつけた。小学生から高校生への、きわめて自然かつユニークな描写にいろどられた時間の移行。こなれた文体、メリハリのついた展開。

「はっきりしたものを見ない」というみーちゃんの抵抗は、読んでいて、応援したいきもちが胸にあふれた。「医師の判断で抵抗をあきらめる」という、みーちゃんの現実的な対応は、「禿が見える」という超自然的なできごとと、ちょうどよくバランスが取れていた。

最後の一文のみ、不要だったかもしれない。それまでのことばは、一文ずつ一語ずつ、まるでいきものようにわかちがたく、有機的につながりをたもっている。

ひとことでいえば、小説を書く才能にあふれている。このレベルの作品を、いくらでも書けそうな気さえする。著者の今後に、いち読者としてここから期待したい。受賞、おめでとうございます。

海外部門。

「この花、ここで咲くわけでは」。立ち飲み屋「玉久」にかよう語り手。常連客のどら声、たちこめる煙。京都の飲み屋にながれる独特の空気感を、冷静な観察眼でこまやかにとらえた。

ぽつぽつと語られる独白のリズムは、まるでカウンターに座った酔客の、リアルなつぶやきのようにひびく。常連ムーさんへの淡い思慕も、酔っぱらった際、みずからの輪郭がいまいになった状態ととらえてみれば、きわめて自然な描写にうつる。

数行ごとに文章のかたまりをつくり、1行ずつスペースをあける、という特徴的な表記を、じゅうぶんに生かしきれていない印象を途中でおぼえた。目の前にみえている風景ばかりでなく、遠い記憶も混ぜこみ、小説の光や音をよりバラエティゆたかにする手もあったと思う。冒頭の、動物が水を飲む場面と立ち飲み屋の関係がわかりづらかった。作品の半ばで、店のテレビに映る映像として登場させたほうが効果的かもしれない。

「そしてまた続く」を、たいへんおもしろく読んだ。全編に、著者の内面からもれだす煙のような、ふしぎな文学的空氣がたちこめている。「湯氣」といったほうが的確かもしれない。

冒頭から、バスタブ、飛びこみ、温泉に河童と、「水」にまつわるイメージが重ねられる。外国人旅行者への不平、スズメへの愛着、少年時代の思い出。思考の断片を接ぎ木していくような、バラバラなことばの連なりを、文学的湯氣がつつんでいる。独特なその読み心地は、「不機嫌なゼーバルト」とでも呼んでみたくなるほどだ。

ゲルダとの観光、マティアスとの別れを経て、語り手は、通底するいらだちのさらにその向こうに、希望の光としての、あらたな「スズメ」を見いだす。みごとなラストだと感じいった。文学に関する教養のみならず、他者にむけられた著者の深い洞察、共感の力に胸をうたれた。受賞、おめでとうございます。

一般部門。

「白鷺と新緑」。冒頭から引きこまれた。小学生ふたりの息づかい、存在していることのみずみずしさに圧倒された。

自分たちの生きているこの世の一部を切りとろうと、カメラを構え、ファインダーをのぞき、全身でシャッターを切る。その瞬間の描写。ふたりは、彼らをとるまわりの私たちは、そうしてぼくたちは、こんなうつろい世界に生きているのか、とあらためて教えられる。

二章、三章と、成長してからのふたりの暮らしが語られるが、その姿が少しぎごちないように感じるのは、ストーリーの展開に合わせるため、恣意的に動かされているようにみえるからかもしれない。CM映像の上で石田くんの音と結の写真が結びつく展開は、とちゅうから予想され、また、そちらへ誘導されている感覚もあって、小説の驚き、という点では少しものたりなかった。

石田父、澤井さんなど、ふたりをとりまく大人たちは、こども時代のふたりと同じく、自然に、生き生きと書かれている。ストーリーにしばられず、著者自身が自由に、書くよろこびをうたいあげれば、よりすばらしい、読むよろこびに充ち満ちた作品になったはず。次回作、期待しています。

「波のゆく先」こそ、読むよろこびに満ちあふれた一作だった。

冒頭の擬音語は適当でなく、璃子が（背後で著者が）、じっと聞き耳を立ててかいている。とても耳がよい。だからこそ書ける、小学生の京ことば小説。京都の小学生ってみんなラッパーやん！

勢いがあるばかりではない。一文一文の閃き、語と語のつながりもナチュラルかつセンスにあふれており、文字を追っていくだけで心身とも心地よくわきたつ。通奏低音のようにひびく「プール 安徳帝 肉親の水死」のテーマも、絶妙の間合いで、小説内をゆらゆらと浮き沈みし、自然なサスペンスをうみだしている。

東京からの転校生、佃くんのやさしさ、小気味よい辛辣さが、まるでともに教室に座っているかのようにリアルに感じた。同級生たちがつぎつぎと自爆していくさまには大いに笑った。璃子と佃くんの距離が縮まっていく描写の絶妙さ。ふたりで手がける漫画の、波の下の京都が、できあがっていくプロセスのワクワク感。どれをとっても忘れがたい。

共作を諦めざるを得なくなるところは本気でぐやしかった。それくらいふたりの姿がうつくしく、尊く感じた。六年間最後の運動会の場面。赤と白の旗。「安徳天皇が死んでもいい世界や、と思った」の一文に、はげしく胸を揺さぶられた。璃子の、小説の「終わり」を感じとったのかもしれない。

すばらしい小説。最優秀としても、十二分な作品、と思った。今後を、ここから期待しています。

「レッツ・オバンギャルド」は、きわめて読みごちのよい作品だった。著者がここから楽しみ、書く喜びをメーターいっぱいには保ちながら最後まで書ききっている。その素直な楽しさ、喜びは、読んでいるこちらの胸に飛びうつらずにはいない。

自転車の教習所、という場所の設定がまずユニーク。福引きで自転車を当ててしまった還暦過ぎの紫香子さん。その「乗れなさ」の描写が、ぎごちない動作、胸のつぶやきふくめ、まるで真横に立ってみせられているかのように的確、かつ笑え、しかもやさしい。

ときおり差しはさまれる、長年の友人Mのエピソード、回想の声。教習所にかよい、少しずつ自転車を前に進ませることができるようになるにつれ（教官との教習の様も見事）、紫

香子さん自身も、生の時間の視界が、じょじょに開けていく。時間の前後関係が、少しまぎらわしい箇所もあったが、紫香子さんの独白の真摯さ、文章のドライブ感で、先へ先へともっていかれる。

ひとつだけ惜しいと感じた点。自転車に乗れるようになる、その喜び、両足をペダルにのせ、ゆるやかにこいで鉄のフレームを前にすべりだせた瞬間の、あの快感について、著者の筆力なら、読者が紫香子さんとともにサドルにまたがり、ともに風をきって進みだしたかのように描写できたのではないか。その瞬間が印象に残っていないのはもったいなかった。

新しい生にむけて、みずからを拓いていくさまを、きわめてていねいな筆致で、こころよく描ききった。きわめて優れた作品だと感じた。受賞、おめでとうございます。

「花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記」。一気に読んだ。読んでいてひたすら楽しかった。きわめて巧みな書き手なのに、その巧みさを前にはおしださず、無理のないまま自然に読者を最後まで導いていく。

一章ごとのエピソードひとつひとつが季節感をはらみ、客観的、かつ彩りゆたかに語られる。そのリズム、つながりの見事さ。

天才肌の源四郎でなく、助手の三左を語り手に据えたことが奏功している。作品内の視野がひろがり、読者がストレスなく物語を楽しめる。

また、絵画や音楽を扱う小説において、作中でどのようにその絵が見え、音楽がきこえるかはきわめて重要。冷静な三左の語りによって、源四郎の作品がまざまざと目の前に立ちあらわれる、そんな視覚的な快感も得られた。

画業を描写するその筆致が、あまた登場するひとびとや、京の街並みを描く際にも、過不足なく活かされている。現実の古都のモチーフを借りて、著者はその見事な筆力と観察眼、絶妙なセンスによって、あらたな京都を物語世界の上に現出させた。そのスケール感も、これまでの応募作にはみられないものだった。

源四郎の絵と、物語の京都に生きるひとびとの姿が重なり、溶けあうラストは、だからこそ感動的だった。この分量を書ききった持続力、目配りも、見事というほかない。最優秀作品にふさわしいと感じた。受賞、おめでとうございます。

《選評》

にし かなこ
西 加奈子 (作家)



撮影：若木信吾

初めての選考で、自戒と共に感じたことは、「作者が物語をどれくらい知っているか」が肝だな、ということだった。作品を書くのは作者なので、もちろんその作品のことを知っているのは当たり前なのだけど、「知っている」量が多いほど、あるいはそれをコントロールしようとする意志が強いほど、物語は魅力的なものから遠のくと感じた。ステイヴ・エリクソンの言を借りると、「作家ではなく作品が主導権を握っているのがいい小説」で、私はそれに完全に賛同している。あるいは、もし自分が主導権を握るのならば、徹頭徹尾コントロール仕切って、誰にも文句は言われないほど完璧なものを書くべきだと思う。これは全く好みの問題だから、確固たる意志がある方はもちろん無視してもらって構わない。

<中高生部門>

「文月の残響」

かつて存在していた文士たちの視線を通じて京都を見つめ直す、という野心的な試みは素晴らしい。でも、その試みの強さゆえか、「僕は、何かを“残す”ために、生きていきたいのかもしれない」、「この本は、彼が残した“蔵書”というより、“遺言”に近いものなのかもしれない」などの「決め文章」のようなものが散見され、物語そのものの強度を損なっていると感じた。書く力、そして書きたい力をお持ちなのだから、読者への目配せやサービスは極力控え目にして、物語が要請してくる文章を書いてほしい。

「十年で二日の修学旅行」

硬質な文章で説得力のある物語を貫く、という姿勢は頼もしかった。だが、それ自体が目的になっているように感じた。「あきちゃん」は本当に死ぬ必要があったのか、その出来事は、「二日の修学旅行」をドラマチックにするための仕掛けに過ぎないのではないか、もう一度よく考えてみてほしい。壮大ではなくても、誰かが死ななくても、切実な物語を書くことは、著者には可能だと思う。

「みーちゃんのメガネ」

みーちゃん、という三人称を使用するには、世界観を貫く技術が必要だと思うが、それが非常に良く出来ていた。終始チャーミング、「若い人はみんな黒髪しか生えてこないと思っていた」、なんて最高だった。みーちゃんの成長が、乱視→眼鏡を嫌っての裸眼→はっきり見える裸眼、という流れによって鮮やかに描かれている。それは同時に「子どもの世界」を

失うことでもある。「赤い人」とのエピソードが、それを後押ししているが、わざとらしくない、どこかとても信頼出来る。時折、「大人が言う「本当の世界」を見ないことは、子供のみーちゃんが出来、唯一の抵抗だった」というような、みーちゃんではなく、著者の存在が大きくなってしまっている場面もあったが、それ以上の眩しさがあった。

<海外部門>

「そしてまた続く」

不穏な冒頭から、思いがけない結末への流れは素晴らしい。特に、「京都を汚す」観光客を嫌っていた主人公が、実はかつて隣人の庭を汚していたことを忘れていた、という展開は見事だった（おしっこまでしていたなんて最高だ）。スーツケースについての考察、寺に並んでいる靴たちへの憎悪、雀への愛着など、ハッとする詩的な表現にもたくさん出会えて幸せな読書体験だった。だからこそ、主人公にとって肝心なものになりうるはずの河童の存在が弱くなってしまったのは勿体無いと思った。

「この花、ここで咲くわけでは」

とてもみずみずしく、切実な瞬間を切り取った物語だと思った。ラストシーン、禁煙の札を置いてくる展開は特に心を動かされた。だが、理解するのに時間を要する表現が散見され、もったいなかった。おそらく著者は素晴らしいカメラ・アイをお持ちなのだろう。短編のショートフィルムを見たような読後感だったが、それ故に、これは小説でなければならなかったのだろうか、という疑問が残った。

<一般部門>

「花洛尽～都絵師の洛中外顛末記～」

源四郎、三左、そして彼らを取り巻く人たちのことが大好きになった。最初、登場人物たちのセリフが現代語であることに違和感を持ったが、源四郎の学ぶ「その人の見たい京を描く」「その時代になかったものも描く」という姿勢が、この作品そのものと呼応しているメタ構造なのだと合点がいった。著者は歴史小説を書いたのではなく、青春小説を書いたのだ。ひとつだけ、小梅さんや被差別の人々、それら全てを描きたい、というのは源四郎だけではなく著者の意思でもあると思うが、当事者でない人物がマイノリティを描くときは、心を配っても配っても配りきれない、と思う。これからも、書く側には特権があるのだという覚悟を持って書いてほしい。

「白鷺と新緑」

アイデアも素晴らしいし、ストーリーテラーとして非常に巧みであると感じた。「人工的」ってなんだろう、と考察する場面なども素晴らしい。だが、「物語を成立させる」とい

う目的のために、情景や人物描写のいくつかは、浅い表現で描かれているように感じた。技術をお持ちのはずなので、一文一文を熟考してほしい。また、読者に対する目配せ、サービスが多いと思う。光希に“あそこには色々、忘れ物をしてきた気がするから”など言わせる必要はないし、物語それ自体も、必ずしも綺麗に帰結させる必要はないと思う。もっと読者を信じてほしい。

「レッツ・オバンギャルド」

タイトルを読んだ時、どのような物語であるか予想できてしまったが（中年女性が自分の殻を破るのだろう）、読んでみると、予想を超えた素晴らしい世界が広がっていた。主人公の紫香子さんの描写や来し方に不自然なところがなく、まるで隣にいる誰かの話を聞いているような体温のある親しみがあった。その上、「経済DVを続ける夫から逃れる」＝「離婚はしないが別居する」という行為が、「自転車に乗れるようになる」＝「自転車で移動できる範囲の自由を獲得する」というささやかな行為と呼応していて、物語としても非常に巧みだった。一番に推した作品が最優秀賞を獲って、とても嬉しい。

「波のゆく先」

小学生が語る京都弁を地の文にするのはとても難しい試みだと思うが、璃子の語り口はとても自然で、でもきちんと引っかかるところもあり、素晴らしく機能していた。「ドクターペッパー売ってる自販機」とか、大好き。ただ、時々、「お母さんの腕に抱かれながら、わたしは心の中にあった空っぽの場所が満たされていくのを感じた。そこは、水泳や漫画で必死になって満たそうとしていた場所に他ならなかった」などのような、「これは璃子の気持ちではなく、作者が言いたいことなのでは？」と思う箇所があって悔しかった。誰より登場人物の気持ちに寄り添ってあげられるのは著者であるはずなので、耳を澄ませて書き続けてほしい。

《選評》

めんじょう つよし
校 條 剛

(作家・評論家)



選考会は中高生部門から始めて、海外部門、一般部門の順に選考を行いました。

・中高生部門

『文月の残響』（純）は、いかにも文学青年らしい決意を表明した作品ですが、基本的な知識に欠けているのが残念でした。漱石が京都を訪ねたのが、二回であるとか、谷崎が大阪生まれであるとか、お粗末なミスがあるだけならいいのですが、文学への拘り方が型どおりの面白くありませんでした。ただ、文章の質そのものには将来性を感じさせます。

『十年で二日の修学旅行』（立川夏喜）は、「てにをは」を落とす癖など単純ミスが多すぎます。構成もぎごちなく、読みにくかったのですが、事故で亡くなる親友あきちゃんの描写が生きていると感じました。中高生部門であることを考慮して、「○」を付けました。

『みーちゃんのメガネ』（山本千遥）は最高評価の二重丸（◎）が三人いて、そのうちの一人は私でした。不思議な短篇です。ほとんど掌篇といっていいほど短いのですが、一行ずつ身がぎっしりと詰まっている食べ物ようで、無駄な贅肉が付いていません。みーちゃんが、せっかく作ったメガネを外し、堀川五条の歩道橋の上から目撃する「赤い人たち」が「平安末期の子供のスパイ」だと吹き込まれるところで、この小さなお話はぐいっと宇宙に飛ばされていくような気持ちになりました。作者の腕力を感じさせます。

・海外部門

『そしてまた続く』（ステッグミューラー・アヒム）は、二十年京都で暮らしているというドイツ人の主人公が語り手です。この主人公は「河童」に同化する夢を抱き、スズメへの愛を語り、インバウンド観光客の少なかった、以前の静かな京都を偲んでいます。インバウンドへの怒りで毎日が楽しくないのですが、彼が不幸なのは妻に去られたせいだとあとのほうで告白されます。幼少期から苦手な高齢のドイツ人女性を京都案内しますが、この女性は記憶違いで、幼少期の彼を気に入っていたのではなく、嫌っていたことが判明します。この二つの事実は、ともにラスト近くに語られるので、突然すぎる印象を持ちました。外国人の異郷物は概して、ドラマ性のある「小説」というより「エッセイ」に近いものになります。次に述べるもう一つの候補作『この花、ここで咲くわけでは』（叁朗）のほうに私が軍配を上げたのはそれも理由の一つでした。

『この花、ここで咲くわけでは』は、考えすぎのタイトルでしょうか、内容と一致していると思えませんが、今回の全候補作中、私がもっとも感情移入できた作品で、かなりの傑作と確信しています。

語彙の単純ミスが目につきますが、比喩表現と心理描写に冴えた腕前を見せます。「あの宙で消えてゆく煙のような浅い笑み」とか「卓上の灰皿は裁縫用の針刺しみたいに」などの表現に唸られます。ズブロッカという薬草が入ったウォッカが登場しますが、それを口に含んだときの文章「徐々に口の中の温度になったお酒が豊潤な薬草の味を舌から広めて、やがて和菓子みたいに淡白な甘みが唾液と融合する」。素晴らしい文章です。私もズブロッカはよく飲んだのですが、こんな風に上手には語れなかったでしょう。

京都の雰囲気を感じられないという委員が何人かおられたようですが、露骨に京都であることの証明を求める必要はないと私は考えます。ひょっとすると、立ち飲み酒場にズブロッカなど特殊な酒が置かれているのは、やはり京都らしさなのかも知れません。

心理的なサスペンスを盛り上げる手腕も今回随一の腕前を示していると感じました。雨の日の深夜、ムーさんを自宅に泊め、翌朝を迎えるまでのドキドキ感はなかなかのものでした。冒頭とラスト近くに描かれる、清冽な川の水を動物たちと同じように口をつけるシーンの意味が分からないという意見がありましたが、私にはタバコの煙に汚れた現世界と谷川の夢幻のイメージとの対比が十分に効果を上げていると思いました。タルコフスキーの映画『ノスタルジア』に故郷の風景が何度か無音で挟まれますが、私はそのシーンを思い起こしました。

もう一つの候補作のほうの支持者が多かったために、本作は優秀賞になりましたが、私は今回候補作の中で白眉の一作だと評価します。

・一般部門

『花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～』（おぎなお紺）は、エピソードの連続展開で飽きさせません。ただ、エピソードの強弱の付け方にさらなる工夫がほしいと感じました。本作の山場は源四郎と小梅の結婚、そして公方一族の暗殺になるかと考えますが、特に公方の事件のほうの盛り上げ方に物足りなさを感じます。現場に目撃者がいない状況ではありますが、源四郎や三左の心理的動揺と絶望感を切実に描いていく手立てはあったはずですが、この作者はコトの表面を描くのは得意ですが、内面に入っていく技量が不足しているようです。従って、キャラクターの造形が浅くなってしまうのです。複雑なキャラを要求しているわけではなく、ライトノベル的な類型でいいのですが、さらなる躍動感と生命力を人物に与えてほしいと感じました。また、この作者は京都の古来の生活、風習、行事に知識が豊富なのですが、意外と「時代小説の基本」にはうといのかもしれませんが。源四郎と三左の二十歳のお祝いをすると思いますが、この時代（というか、明治までずっと）元服のお祝いは十代で済ま

せるのが常識です。このような基本中の基本を知らなかったとすると、この作者は時代小説の基本をもっと勉強しなければいけないでしょう。この作品の評価は「○」でした。

『白鷺と新緑』（遊部香）は何よりも茶処宇治を舞台に選んだのがお手柄だったと思います。宇治茶の茶摘みの様子を丁寧に描いているのもグッドでした。しかし、この作品のテーマはお茶畑の景観にあるのではなく、川の流れの「音」や白鷺の飛び立つときの「写真」にあるという設定に目を見張らせるものがありました。第一章からエピローグまで全四章の語り手をひとつずつ変えていることもいい効果をもたらしているのですが、第二章は石田の語りでもよかったのではないかと思います。成長した石田の心中を描写する言葉がどこにも書かれていないのは、作品のテーマを敷衍するうえでマイナスだったろうと思うからです。第一章は丁寧に慎重にストーリーが進んでいきますが、第二章以降の軽い運びがラストの感動を薄めているような気がするのです。

次の『レッツ・オバンギャルド』（万願寺マサ子）は、四つの候補作のうち、私が無印（低評価）にした一作でした。この小説の最大の弱点はタイトルから受ける諧謔味が本文には存在しないことだと思います。タイトルのおちゃらけムードとは裏腹にきわめて真面目な内容と文章でした。マジメ一筋の言動が逆に笑いを誘うことは、筒井康隆の諸作でお馴染みの作法ですが（たとえば「関節話法」）、この作者にユーモアとウィットが備わっていれば、もっと読み手を楽しませる内容になったはずです。晩年に差し掛かってからの自転車教習の大変さを描くことと並行して、積年夫に忍従していたことへの振り返りと、関係改善の努力が描かれますが、最後あっさりと夫が折れてくる展開は安易ではないでしょうか。親友の名前を頭文字でMとだけ記すのも意味のあることとは思えません。ひょっとして、この小説は事実をそのまま題材とした一種の手記のようなものなのではないでしょうか。高評価できない理由がいくつもあったということです。

『波のゆく先』（橋爪志保）は、今回の一般部門候補作中で私が最高評価をした作品です。ただし、二重丸（◎）は私のみでした。文章の切れ、比喩表現、心理描写、いずれもピカ一だと思いました。小さいエピソードを重ねて、ストーリーを盛り上げる手腕も見事です。語り手の主人公が子供なので、小さな世界での出来事が綴られますが、そのなかでも主人公にとっては大きなショックと感動があるわけで、それが素直に伝わってきます。主人公の璃子が、父親は自殺したと思い込んでいたのに、実は心臓麻痺だったという新事実に驚くところなどがその好例です。冒頭に語られる安徳天皇の入水にリアルな苦痛を覚える心理が実は父親の事故死に結び付いていたせいだとか、巧妙に張られていた伏線を回収する技もわざとらしさから免れています。ただ、タイトルの「波のゆく先」は、一目で印象に残りませんか、再考されたほうがいいでしょう。

さて、圧倒的に高評価を得る作品が一作もないなかで、最高評価の二重丸（◎）は一人だったものの満遍なく票を集めたのは、『花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～』でした。読者選考委員賞との同時受賞も順当なところでしょう。次に注目されたのは全体の評価は決して高くありませんでしたが、最高評価が三人の『レッツ・オバンギャルド』でした。最終投票で、私も『レッツ・オバンギャルド』を再評価して、受賞に賛成しました。◎の委員が三人もいるというのは、やはり無視できなかったのです。平均的に高めの評価であるよりも、最高評価と低評価の際立った凸凹が作者の才能の証明であったケースを度々見てきた経験から判断しました。『花洛尽～都絵師の洛中洛外顛末記～』との二作受賞も色合いのまったく違う者同士、バランスがいいとも思いました。

私が二重丸（◎）を付けて一番に推していた『波のゆく先』は優秀賞という評価になりましたが、当初◎が二人いて、満遍なく票を集めた『白鷺と新緑』が無冠という結果になってしまいました。あえて言えば、「ここぞ」とアピールする力に不足していたということになるのでしょうか。この作品の作者には捲土重来を期待するしかありません。